

「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」の意味分析

小林 典子

要 旨

外国人日本語学習者に誤用されやすい副詞「必ず・ぜひ・きっと・確か・確かに」を取り上げ、どのような指導をすれば、誤用文を作らなくなるのかを考察する。まず文レベルで、これらの副詞と文末との形態的な共起制約を論ずる。しかしその文の表現意図の先触れとして現れる多くの副詞、特に陳述副詞は1文レベルの形態的な文末との共起関係だけの指導では十分でなく、談話（discourse）レベルまで踏み込んだ意義記述が必要であり、有効である。本稿では日本語学習者の誤用、日本語母語話者及び日本語学習者に対するテスト、実際の授業の一例などを提示しながら、類義的なこれらの副詞について考察する。

〔キーワード〕 副詞 誤用分析 共起制約 文レベル 談話レベル

1. はじめに

中上級の日本語学習者に、どんな文法がまだよくわからないかと問うと、「副詞」という答えが、他の困難だろうと思われる文法事項とともに必ず返ってくる。彼らは副詞の使い方に自信がない。小林（1988）は、外国人日本語学習者による副用語（副詞及び副詞的用法の語句）の誤用を収集して次のように分類した。

- (1) 発音からの誤用（正確に表記できない。）
- (2) 漢字の意味に誘発された誤用（漢字圏の学生に多い。）
- (3) 数量・程度・比較の誤用（量と程度の混乱などが多い。）
- (4) 時の誤用（助詞とのからみ・「今」の使い方が難しい。）
- (5) 発想の不理解からくる誤用（様々な共起制約を知らない。）
- (6) 文法機能的誤用（助詞・活用形の間違いなどが多い。）
- (7) 文型にからむ誤用（体言を修飾するのか、用言を修飾するのか。）

この分類を踏まえて、中級レベルの留学生に副詞の授業を行ってみたが、(5)の分類に含まれる副用語を指導するのは大変難しいものであった。何を、どのように説明し、指導すれば、誤用文を作らなくなるのか、結局は教師の側が、その副用語の意味を客感的に正確に理解しているかどうかを試されることになるのである。本稿では、小林（1988）が収集した誤用例の中から、類議的な

「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」を取り上げ、どのような意義記述があれば、誤用文を作らなくなるのかを考察する。まず文レベルでの形態的な共起制約を考え、次に談話レベル¹⁾での文脈から来る制約を見ていき、授業での指導の一例を示す。

2. 収集された誤用例

次にあげるのは、外国人留学生の作文に見られた誤用の例である。副用語以外の誤りは直してある。*印は非文であることを示し、_____部分が_____部分がおかしなところである。

- * (1) 私は夏休み中にきっと論文の準備をやり終わりたいと思っています。
- * (2) 公務員は必ずマレー人ではありません。
- * (3) 私たちが毎日見るテレビ、新聞、雑誌や、毎日通る商店街や駅ビルなどに確か広告というものが入りこんでいる。
- * (4) 看護婦の態度はぜひよくなる。
- * (5) ぜひ日本に留学することを考えた。

このような誤用は彼らが辞書的な意味だけを頼りに文を組み立てていることに起因しているようである。例えば、彼らがよく使っている例解国語辞典(三省堂)で「必ず」と「きっと」を見ると、次のような記述になっている。

必ず : ①万に一つも、はずれることなく。②きっと... する

きっと : ①みこみや期待がはずれないはずだという気持ちを表す。まちがいがなく。

②態度が急にきびしくなるようす。

これらの記述はそれぞれの語の中心的な意味を捉えているとは思いますが、やはりこれだけでは、誤用が避けられないだろう。筆者が指導した中級レベルの留学生は、表題にあげた副詞それぞれの違いについてよくは知らず、意味は同じで強さが違うだけだと思っていたそうである。副詞の指導は十分受けておらず、学習者たちが辞書(対訳の辞書、国語辞書)を頼りに、自分たちの勝手な判断で適当に使い、その使い方不安を感じているのが実態である。

3. 文レベルでの共起制約

これらの副詞に関して以下の論文を参照した。それぞれの論文で取り上げられている副詞のうち、本稿に関係あるものだけを「」に示しておく。森田(1977)「必ず・確かに・確か・きっと・ぜひ」、小林幸江(1980)「必ず・きっと・ぜひ」、工藤(1982)「必ず・きっと・ぜひ」、小矢野(1983)「確かに」、佐治(1986)「必ず・きっと」、石上(1987)「きっと」、森本(1990)「ぜひ」が取り上げら

れている。

一方、筆者はテスト1（「確かに」「きっと」「ぜひ」を含む文について、○：正しい、△：よく分からない、×：間違い、を問うもの）を日本語母語話者10人にやってもらった。テスト1の左横にそれぞれ○△×を入れた人数を示してある。

表1
 <テスト1とその結果>

○	△	×	【確かに】
0	1	9	私は大学院の試験を受けたいので、確かに勉強しました。
8	1	1	ホリウチさんは確かにブラジルの人です。
10	0	0	確かに小林先生はきのう三時頃学校へ来ました。
0	0	10	確かに来週までに実験を終わろうと思います。
2	2	6	確かに荷物を取ってください。
10	0	0	私は確かに昨日友達からの小包を受け取った。どうしてなくなっただろう。
10	0	0	確かにドイツ語は日本人にとって難しいです。
0	0	10	確かに来年は留学しよう。
4	0	6	確かに来週は大阪に行かなければなりません。
			【ぜひ】
1	4	5	私は忙しくてもぜひ夏休みの旅行に参加すると決めた。
10	0	0	この本はおもしろいと思いますから、ぜひ、一度読んでください。
10	0	0	あの映画はすごくいい映画ですから、ぜひ見ておきなさい。
10	0	0	あの人とぜひ会いたい。
0	1	9	あしたは東京で友達とぜひ会う約束をした。
0	0	10	山田さんはアメリカへぜひ行くだろう。
0	0	10	今度の休みにはぜひどこへも行きたくない。
3	5	2	アルバイトをしてぜひ車を買おう。
8	1	1	その車をぜひ欲しいと思った。
1	4	5	その車がぜひ欲しかった。
			【きっと】
0	3	7	夏休み中にきっと論文の準備をやり終わりたい。
6	0	4	私の国には冬の間、きっと学生割引があると思います。
10	0	0	あの人だったらきっとくるでしょう。
8	1	1	修士課程に入ったらきっとレポートをたくさん書かなければならない。
5	3	2	きっと来週来て下さい。
9	1	0	きっと行きます。待っていてください。
4	1	5	彼がくるとききっと雨が降る。
3	2	5	あなたはマイケルジャクソンのファンだから、今晚のコンサートへきっと行くでしょう。
5	2	3	今週、私はきっと家にいます。
8	0	2	きっと、あの人は来ない。
6	2	2	きっと、いつか留学しよう。
3	3	4	きっと、彼女に会おう。
6	1	3	犯人はきっと車で遠くへ逃げた。
1	2	7	私はきっと事故を起こした。

これをみても明らかのように、はっきり傾向のあるものと、かなりばらつきのあるものがある。特に、「きっと」についてはばらつきが激しく、小林幸江(1980)が「きっと」は「(らしい)」「ようだ」を除いて)その共起性の範囲は無制限とも言える」と述べていることもうなずける。佐治(1986)のテストも文レベルのものであるが、その結果もやはりばらつきが見られ、佐治は「人間の語感はいずれに異なっている」と指摘し、「誰か一人の語感に頼るだけでこういった問題を云々することはいかに危険であるかということ物語っている」と言っている。確かに語感の違いもあるだろうが、文レベルのテストでは、人によってその一文から想像する文脈が異なるわけで、語感よりもむしろどんな文脈を考えたかによって判定が左右されているのだと筆者は考えている。

そこで、先の論考とこのテスト1を基に、文レベルでの形態的な表現形式の共起制約を整理すると、表1のようになった。但し「確か」についてはテストがなく、森田(1977)と筆者の語感を頼りに記した。「言える」と判定の出ているものは○、判定に揺れのあるものは△、そして「言えない」と判定する人の多いものは×とした。この○のついたものだけを×は使わないように指導すれば、一応、学習者の誤用は少なくなるはずである。しかし、この表にそって文を作っても、実際の談話の中ではおかしいものが作られる可能性は十分にあり、また、ここでは△や×がついているのに、全然おかしくない用例もみつまっている。従って、表2はある種の傾向としては正しいが、常に有効とは限らないのである。ただ、学習者にとっては非文を排除する助けにはなろう。

表2

	必ず	きっと	ぜひ	確かに	確か
～ダ(名詞文)	×	○	×	○	○
～イ(形容詞文)	×	○	×	○	△
～ル(非過去)	○	○	△	○	○
～タ(過去)	△	△	×	○	○
～テイル(状態・進行)	○	○	×	○	○
～ナイ(否定)	×	○	×	○	○
～タイ(願望)	△	△	○	○	×
～ヨウ(意向)	○	△	○	×	×
～ラシイ(不確実な推定)	△	△	×	○	○
～ダロウ(蓋然性)	○	○	×	○	○
～シロ(命令)	○	△	○	×	×
～テクレ(依頼・命令)	○	△	○	×	×

4. 個々の副詞の検討

前節の表2をもとに個々の副詞について検討しておこう。

4. 1 「必ず」

工藤(1982)は「必ず」の用例の中で、「確率が(ほぼ)100%でそのコトが実現することを表わす用法が一番多かった」と指摘している。

表2では名詞文と形容詞文は×である。佐治(1986)は、「必ず」は「変わり得る余地のある文末と共に起す」と言い、(6)がおかしいのは「述語が変化の意味を含まない状態性のもの、形容詞や形容動詞」であるためだとしている。また佐治は「必ず」は「ある種の条件句を含んだ文中に現れる」ことが多く((7)(8))、「～すると」とか「～するとき」のような文中に「必ず」がよく現れると指摘している。しかし、形容詞や形容動詞の文では、例え条件句があっても文は成立しないとして(9)(10)を示している。(9)(10)は佐治の調査では△となっている。

* (6) あの人は必ず先生でしょう。(佐治1986)

(7) あの人は夜は必ず家にいます。(〃)

(8) このあたりは冬になると必ず雪が降る。(〃)

△(9) 図書館はいつきても必ず静かだなあ。(〃)

△(10) ここはいつ来ても必ずさわがしいなあ。(〃)

佐治が示すように、条件句があっても確かに「必ず」は名詞文や形容詞文とは共起しないようである。しかし、

(11) あのカメラ店はいつ行っても、必ず安い。

は言えそうである。これは「いつも必ず安く売っている。」という意味であって、繰り返されて安く売られている場合の確率を問題にしているため、正しい文だと言えよう。文レベルのテストによる表1では×となっても文脈によっては正用となる例である。

次に過去形の場合を見ていこう。表2では過去形は△としておいた。

* (12) 昨日は必ず9時のニュースを見た。

* (13) このあいだのパーティで必ず木村先生に会った。

このような、過去の1回きりの事実を述べた文がおかしな文であるのに対して、

(14) 私は必ず父の帰りを門の前で待ったものだ。

(15) このあたりは冬になると必ず雪が降った。(佐治1986)

(14) (15) は問題ない。佐治は、(15)は「冬になると」という条件句があるために、過去の事実であるのに「必ず」が採用されていると説明している。しかし、

* (16) 昨日は家に帰ると、必ず9時のニュースを見た。

とは言えない。「条件句が含まれているかどうか」ではなく、(14) (15)のいずれも、繰り返されて実現される確率が100%のときは過去の事実の場合も「必ず」が使えると説明するほうが適切と考える。

(14') 私は必ず父の帰りを門の前で待った。

(14')を読んだ人がこれを過去の習慣と読めば、○と判定するだろうし、ある過去の1回きりの出来事と読めば×と判定するだろう。～タが多様な機能を表すために具体的な文脈がなくては判定できない例である。寺村(1971)は、～タが過去や完了を表すほかにいろいろなムードを表すことを詳しく説明している。形態だけで共起を云々するのは危ない。

否定形との共起も×となっている。佐治は、～ナイが形容詞と同じく状態性であるためであるとしている。

* (17) あの方は必ずやさしくない。(佐治1986)

* (18) 必ず来ないでくださいね。(ク)

確率が100%であっても、否定の場合は「必ず」は使えず、「決して」を使わなければならないと、指導する必要がある。

～タイや～ラシイは△とした。～タイは実現の確率が100%保証されていないからそれを願望するという表現であり、これは「必ず」の意味とは矛盾することになる。また、～ラシイも不確定な推定表現であり、「必ず」とは意味があわないために、座りの悪い文となる。

4. 2 「きっと」

「きっと」は、コトに対する話し手の強い確信や期待を表すものだが、推量の意味を必ず含むものである。表2の中で断定的な言い方が○なのは、そこに推量の意味を補って解釈できるためである。

- (19) きっと雨が降る。(ダロウ)
(20) きっと私は行かない。(ト思ウ)

佐治も次のように述べている。

「きっと」はなんらかの意味で推量の意を帯び得る文末としか共起しない。「あの人は～間違っていない」にしても、文末は断言的だけれど、そこには「と思う」といった推量が入り得る余地があるから「きっと」が○になっているのである。「きっと」は話し手が強くそう推量する気持ちを表すものだと言ってよかろう。(佐治1986)

筆者のテスト1では、「きっと」の意味のとらえ方は、ここにとりあげた副用語の中では、人により一番バラつきがあった。地域差、年齢差もあるかもしれないが、前述したように、一文から想像した文脈によって判定が違ったのだと考える。次の2文は、石神(1987)において「きっと」の正用例として取り上げられているものに対するテスト1の結果である。

- (21) きっと来週来てください。(○5人、△3人、×2人)
(22) 彼が来ると、きっと雨が降る。(○4人、△1人、×5人)

工藤(1982)は、「きっと」に3つの意味があると仮定し、①話し手の確信、②確実に実現されることの話し手の期待、③一定条件下での確率、をあげ、中で③はすたれつつある意味としている。(22)がこの③にあたり、テスト1においても判定がゆれているのがわかる。

表2で、～タ(過去)は△としたが、佐治は次の2例を×と判定している。

- * (23) 私は昨夜ここに財布があるのをきっと見ました。(佐治1986)
* (24) あの人はきっとやさしかった。(同上)

しかし、次の例文は筆者のテスト1で判定がゆれた。

- ? (25) 犯人はきっと車で遠くへ逃げた。(○6人 △1人 ×3人)
? (26) 私はきっと事故を起こした。(○1人 △2人 ×7人)

前者の例文は、ダロウを補って解釈できると判断した人が○としたと思われる。後者の例文でも、ダロウが補えれば○となっただろう。もし、前後に次のような文脈が流れていればどうだろうか。「あの時は徹夜した後だったから、もし運転していたら、私はきっと事故をおこした(ダロウ)。運

転しなくてよかった。」この場合は反実仮想となり正用となるだろう。

～タイや～ヨウが△になったのは、自分自身の願望や意向を人ごとのように推量で表現するのはおかしいと感じるからだと思う。～ラシイも△となったが、「きっと」が蓋然性の高いことを示しているのに、～ラシイはそれが弱いためにおかしく感じるのだろう²⁾。～シロ（命令）や～テクレ（依頼・命令）も△であるが、話し手がどのような気持ちで言っているかによって、「きっと」との共起が可能になったりならなかったりするようである。これについては後節でも検討する。

4. 3 「ぜひ」

森田（1977）は、「是が非でも、つまり良くても悪くても必ず、の気持ち。後に依頼・希望・願望などの表現を伴う。」と書いている。また、「自己または他人に対する意志的な行為・状態の願望で、無意志的な場合に使うと不自然になる。」と指摘している。表2で、名詞文～ダ、形容詞文～イが×となったのは意志性がないためと説明できるし、～タイ、～ヨウ、～シロ、～テクレが○なものもこの説明と一致する。工藤（1982）も、次のような形式が共起して用いられるとしている。

依頼／してください etc.； 命令／しろ etc.； 勧誘・意志／しよう・するつもりだ etc.； 希求／してほしい・してもらいたい etc.； 希望／したい； 当為／しなければならない・する
といい・必要だ etc.

また、工藤は「*ぜひきのう私が行きました」のような「ごくありふれた現実認識（報告）的な叙法の文（テンスが典型的な形で分化している）には用いられない」としている。～タの場合は、このように「ぜひ」と共起しない（反実仮想を除いて）。～ル（非過去）の場合、△となったのは、話し手と行為者が同じ場合は(27)意志を表わすことがあるので言えそうであるが、3人称の場合(28)それができないからである。

(27) 私はぜひあした行きます。

* (28) 山田さんがぜひあした行きます。

また、連休修飾句に入った～ルの場合は、言い切りの場合にはあった意志のムードが消失するためか、テスト1では判定が×とでている。

* (29) あした東京で友達とぜひ会う約束をした。(○0人、△1人、×9人)
～ナイといった否定の場合は、たとえ意志や願望を表す文末がきても言えない。

* (30) 今度の休みにはぜひどこへも行きたくない。(○0人、△0人、×10人)

動作及び状態の描叙～テイルが×となったのは、「ぜひ」がもつ意志性とそぐわないためと考えられる。

～ラシイ、～ダロウも×となっているが、これらには願望・依頼・意向のムードがないためと考える。

～ヨウ（意向）については○となっているが、次のような判定もあった。

? (31) アルバイトをしてぜひ車を買おう。(○3人 △5人 ×2人)

「アルバイトをして」と具体的な方策が示されているために、「ぜひ」と相入れ難くなったのかもしれない。「ぜひ」には、何がなんでも、どんな状況でも、というような意味があるために、具体的方策とは意味が合わないためだろう。

(32) 来年こそはぜひ会おう。

(32)のような具体的方策のない場合には、よく使われている。したがって、同じ～ヨウという文法形態でも、その文の意味によっては正用とも誤用ともなるのである。文法形態からだけの指導では充分でない。「ぜひ～しろ（命令形）」も○となっているが、これも後に述べるように文脈によって、判定が違ってくる。

4. 4 「確かに」

述べようとする事柄、状況が、確かなものであると確認する意味の副詞で、コトを注釈する副詞のひとつである。注釈副詞は「ぜひ」「きっと」といった主観的な陳述副詞に比べると、より客観的な判断を示す副詞である。従って、「確かに」は林（1960）の判断の段階、南（1964）のB段階に作用する副詞と考えてよいだろう³⁾。

表2にあるように、～ダ、ル、タ、テイル、ナイ、とは問題なく共起する。～ラシイや～ダロウは話し手の推量のムードを表すが、これとも共起する。

(33) A：部屋の中が荒らされている。泥棒にやられた。

B：確かに誰かが入ってきたらしい。

(34) A：あそこは魚がおいしいらしいよ。

B：そりゃ、確かにおいしだろう。海のそばの旅館だもん。

(33)(34)の「確かに」は「誰かが入ってきた」コト、「魚がおいしい」コトに係っていて、その外

側にある～ラシイや～ダロウというムードには係っていないと考える。しかし、～ヨウ（意向）、～シロ（命令）、～テクレ（依頼、命令）などとは共起しない。事柄・状況の確認を意図する「確かに」とは意味的に合わないためであろう。

4. 5 「確か」

日本語学習者は英語で probably と英訳をつけたり、「たぶん」と意味をふったりしていた。その結果次のような文を作っている。

* (35) あすは確か雨でしょう。

* (36) このような事故が確か高速道路で起こるかもしれません。

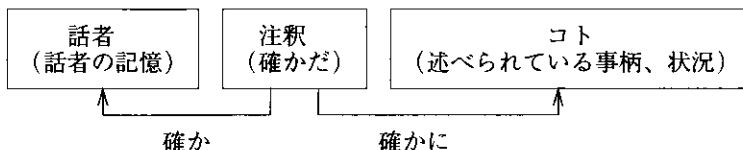
「確か」も「確かに」と同じように、先に述べられている事、あるいはこれから述べようとすることが確かなものであると、確認する表現意図をもっている陳述副詞である。しかし、「確かに」がコトを問題にするのに対して、「確か」は話し手の発話態度を問題にしているのである。つまり、「確かに」が、そのコトが確実であるということを確認するのに対して、「確か」は、話し手の判断の根拠となったそのコトの記憶を確認するものである。その結果、逆に、話し手の判断があやふやであることを示し、コトの内容が不確かであることを表現することになる。(35)、(36)は「たぶん」、あるいは「もしかしかたら」としなければならない文で、「確か」はおかしい。判断の根拠を話し手の記憶に想定しにくいからである。「あすは雨」のコト「事故が高速道路で起こる」コトは話し手の記憶にない。自分の記憶を確かめようとする不確かさが、probably の意味を出しているのである。森田は、「“判断の根拠は記憶なので不確かだが、その記憶が正しいとすればその事柄は間違いなく成立するはずだ” という含みを持った表現」として、次のような例をあげている。

(37) 今日は確か父の日だったね。(森田1977)

(38) 確か明日の午後日本に着くはずだ。(ク)

～タイは「確かに」と共起するが、「確か」とは共起できない。自分の願望を述べるのに、自分の気持ちがよくわかっていないのではおかしいことになるからである。従って、同じ陳述副詞に分類されていても、「確かに」はコトに向かっているものであり、「確か」は発話態度に向かっているものであると言えよう。林の表出の段階、南のC段階に作用していると言えるだろう。「確かに」はよりコトに近いところに、「確か」はよりムードに近いところにあるのである。

これを図示すると次のようになろう。



5. 談話レベルでのテスト

5. 1 日本語母語話者と外国人学習者との比較

一文を与えられたとき、そこからどのような文脈を想像するかによって、判定に違いがでてくることは先に述べた。そこで、談話レベルでのテスト2を日本語母語話者（8人）と中級レベルの外国人学習者（13人）にやってもらった。

〈必ず、きっと、ぜひ、確か、確かに〉の5つの副詞の中から（ ）の①～⑬に適當と思われるものを一つ選ぶ形式のものである。

表3
〈テスト2とその結果〉

	問 題	外国人学習者	母語話者
1	A：あれっ、さいふがない。 スーパーに忘れてきちゃった。 B：(①) なくなっている だろうね。	きっと (4) 確かに (4) 確か (3) 必ず (1) ぜひ (1)	きっと (7) 確かに (1)
2	A：あの女を (②) 殺せ。 B：わかりました。	必ず (6) 確かに (3) ぜひ (3) きっと (1)	必ず (8)
	A：殺したか。 B：(③) 殺しました。	確かに (7) 確か (3) ぜひ (1) 必ず (1) きっと (1)	確かに (8)
3	A：あの人、知ってますか。 B：さあ、(④) 留学生のパーティ で会ったような気がするけど。はっ きり覚えていないな。	確か (6) 確かに (3) きっと (3) 必ず (1)	確か (8)
4	A：子供のころ、学校から帰ると すぐ (⑤) 宿題をした ものだ。	必ず (11) ぜひ (2)	必ず (7) 無答 (1)
	B：へええ、僕なんかすぐ遊びに 行ったよ。 A：そんなことしたら、(⑥) 母にしかられたんだ。	きっと (8) ぜひ (2) 必ず (1) 確か (1) 無答 (1)	必ず (5) 無答 (3)

5	A：あのう、先週手紙を送ったんですけど、届きましたか。 B：あ、(⑦)受け取りました。	確かに(6) きっと(4) 確か(2) 必ず(1)	確かに(7) 確か(1)
	A：そのミーティングなんですけど、出席できますか。 B：はい、(⑧)出席します。	ぜひ(7) 必ず(5) きっと(1)	必ず(6) きっと(1) ぜひ(1)
6	A：新しい家に引っ越ししましたから(⑨)遊びに来てください。	ぜひ(11) きっと(1) 必ず(1)	ぜひ(8)
	B：(⑩)きれいな家なんでしょうね。	きっと(9) 確か(3) 確かに(1)	きっと(7) 無答(1)

このテストのような談話の場合、日本人は全員がほぼ同じような文脈を想像できるように、回答のばらつきが少なく大抵一つの副詞にしばられている。つまり、談話レベルでは文脈が具体的にあって副詞の選択幅が狭まるわけである。一方、外国人学習者は辞書の意味だけにしか手がかりがなく、それぞれの違いが分からず、かなり混乱していることがわかる。このような短い談話では、場面を描くのが難しい場合もあったかもしれない。学生たちは、日常会話ではさほど不自由しない中上級の学生であるが、このテスト結果を見ると、副詞があまり習得されていないことがわかる。

5. 2 談話レベルでの検討

テスト2のような誤答がなされないようにするには、第3節の表2や第4節で検討した個々の副詞の意義・機能の特徴を学習者に習得させなければならない。

5. 2. 1 具体的な文脈

①の場合「きっと」が一番自然であり、他の4つは誤答または不自然である。

「ぜひ」：～テイルダロウとは共起しない。(表1によるチェック)

「必ず」：繰り返して実現される確率100%のことに対して使うが、財布を忘れるという一度だけできごとであるからおかしい。

「確か」：判断の根拠となる記憶を確認する場合に使うが、財布がなくなっていることは記憶にないのでおかしい。

「確かに」：事柄や事態の確認に使うが、財布がなくなっているという事態はまだ確認の段階になくておかしい。しかし、もし「もうなくなっているだろうな。」と心の中でつぶやいていたとしたら、Bは「確かに」と、そのつぶやいた事柄を確認できるかもしれない。

①の誤答に対しては上記のように説明できるが、これは具体的な文脈があって、はじめて説明が可能になるのである。

5. 2. 2 同じ文法形態でも異なる会話機能

②の場合、A、Bは殺し屋の親分・子分のような関係と即座に想像できるだろう。これはAのBに対する強い命令であり、100%の確率で「殺す」という行為をBに成し遂げさせるものである。この場合、「必ず」しか適当ではない。母語話者は、全員「必ず」を入れている。ところが、学習者は「確かに」、「ぜひ」、「きっと」なども入れている。表1において、～シロは「きっと」が△、「ぜひ」が○、「確かに」が×という共起制約であった。従って、「きっと殺せ。」「ぜひ殺せ。」は、構文的には誤りとは言えない。しかし、この談話の中での意味を考えると、変な表現だと感じる。次の文も命令形である。

(40) 辛いことがあったら、必ず／ぜひ／きっと、帰ってこい。

先の例の「殺せ」が強い命令であり、相手に有無を言わずその行為を遂行させるのに対して、「帰ってこい」は勧誘である。この場合は、「必ず」、「ぜひ」、「きっと」、いずれも言えるだろう。

5. 2. 3 談話レベルでの再検討

「必ず」、「ぜひ」、「きっと」が、命令・勧誘に使われた場合を比較すると、行為の遂行の決定力の強さに違いを感じる。話し手の掌中に一番強く決定力があるのが「必ず」で、次に「ぜひ」、その次に「きっと」と、次第に、決定力が弱くなる。「ぜひ」は意志性の文末表現、例えば～ヨウと共起できるが、「きっと」は少し不自然なようである。また、～テイルという描叙表現とは「きっと」は共起するが、「ぜひ」はしない。このように、「ぜひ」のほうは意志的・スルの、「きっと」は無意志的・ナル的と言えそうである。

(41) 必ず遊びに行きます。

(42) ぜひ遊びに行きます。

(43) きっと遊びに行きます。

(41)～(43)は同じような願望であっても、自分の意向通りになるかどうか、その決定力に違いが見られよう。こうして見ると、(41)のほうが、(42)、(43)より積極的な感じがするだろう。

そこで、次の談話を検討しよう。

(44) 医者：この薬を飲み続けなければ死んでしまいまから、(必ず ?ぜひ ?きっと)
飲んでください。

患者：はい。わかりました。(必ず ?ぜひ ?きっと) 飲みます。

この場合、医者も、患者も、「薬を飲む」という行為を、相手まかせのままに、無責任にはできないだろう。医者は100%の確実さで患者に薬を飲ませなければならないし、患者もまた、100%で、これを実現しなければならない。このようなときに、「ぜひ」や「きっと」は使えない。

談話レベルまで踏み込んだの検討を命令表現と副詞の関係で見てきたが、このように文法は、談話の中でどういう会話機能をもっているかという視座からも検討を加えられるべきである。

6. 実際の授業での説明

実際の授業では、文法用語を並べたり、作用域の説明をして理解させることはできない。先にもあげた談話レベルの例や、以下に紹介するような例文を、具体的に示して指導した。

・あなたは今、胃の調子が悪いので、医者に行きました。ガンじゃないかと心配です。次の医者の会話はどちらの方が安心しますか。

(45) A 医者：きつとなおりますから、心配しないでください。

B 医者：必ずなおりますから、心配しないでください

ここで、「きっと」は医者の推量のムード、「必ず」はなおる確率が100%、ということになるから、Bの方が安心だと説明できる。

また、「確かに」と「確か」の場合も談話を利用して説明し、以後の誤用が少なくなった。

・あなたはバイクに乗っていて、交差点で警官に捕まりました。一時停止をしたつもりなのに、警察はしていないといっています。あなたはAとBとどちらを言いますか。

警官：一時停止をしなかったね。

(46) A：いいえ、確かちゃんと止まりましたよ。

(47) B：いいえ、確かにちゃんと止まりましたよ。

Aのように言ったら、もう希望がなくなり、Bのように言ったら警官の方が自信がなくなるかもしれない、と説明して、「確か」が発話者の記憶を確かめるもの、「確かに」が内容を確認するものと納得させた。

このように、談話の中での指導が有効であり、必要であると思う。

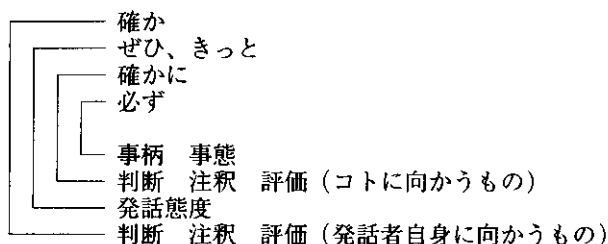
7. おわりに

外国人学習者が誤用をしないために、どのような観点から副詞をとらえなければならないかを考

えてきた。第3節では、文法形態との共起の問題を扱った。しかし、同じ文法形態でも同じ共起制限があるとは限らないことを、第4節以降で述べ、談話レベルから検討した。

最後に、ここで扱った副詞について、これらの係り受けと意義の両面で整理しておこう。文が、コト（叙述）的側面からムード（陳述）的側面へと幾重もの層をなしているらしきことは、徐々に明らかにされつつある。ここで取りあげた副詞がどのような文の層に係っているかを図示してみよう。外側にいくほどムードが強くなり内側にいくほどコト的になると考える。一般的には、「必ず」は情態副詞、「確かに」より外側に示したその他の副詞は、陳述副詞と呼ばれているが、「確かに」には、小矢野（1983）も指摘しているように情態副詞の用法（「確実に」の意味）もある。従って、「確かに」に係っている層は丁度コトとムードの両方にまたがる辺りと考えてよいだろう。

<副詞とその係り方>



<意義特徴>

- 必ず**
- ・確率がほぼ100%であるという意味である。
 - ・くり返して起こる可能性のあることについて言う。
（過去の一度限りのできごとには言わない）
 - ・変化の意味を持つ動詞に係る。
（形容詞や名詞のような状態性の文では言わない）
- 確かに**
- ・コトを注釈して「確かだ」と判断する意味である。
 - ・意向、命令、依頼の文には使わない。
（情態副詞の「確実に」の意味の「確かに」の場合を除く）
- 確か**
- ・話し手の判断の根拠となった記憶を、「確かだ」と自らに確かめようとする表現。結果的に、不確かであることを示す。
 - ・意向、命令、依頼、願望には使わない。

- きっと ・強い確信や期待を示す。
 ・推量の意味を含む。
 ・ナル的（無意志的）である。
- ぜひ ・行為・状態の願望表現（～タイ、～ヨウ、～シロ、～テクレ）とともに使う。
 ・「何がなんでも」という気持ち（具体的な方法は言及しない）を言う。
 ・文末表現～ルとは一人称の場合のみ共起する。
 ・スル的（意志的）である。
 （名詞文、形容詞文～テイルのような状態文には使わない）
 ・肯定文（否定では使わない）でのみ言える。

英語では certainly とか surely と訳される（「確か」 probably）これらの類議的な副詞の用法は、文レベルでの文法構造からだけではなく、語彙、語用を含む談話レベルでの機能からも検討されなければならない。～ル、～タ、～テクレ、命令形等の様々な文末表現は、文レベルだけでは規定できないムードを談話レベルにおいて表出する。ムードの先触れとしてある陳述副詞を指導するには、談話レベルに踏み込んでの説明が不可避である。

注

- 1) ここで言う「談話」とはいくつかの文が集まって、1文よりも具体的な文脈をもったひとかたまりの文の集合、のことである。
- 2) 小林幸江（1980）では、～ラシイ ～ヨウダは「きっと」と共起しないとされている。
- 3) 文を2層に分ける考え方は、時枝の詞と辞、渡辺実の叙述と陳述、寺村のコトとムードなどの用語によって一般的であるが、さらにそれぞれの層が分化しうる事が指摘されている。林（1960）は、「描叙段階」、「判断段階」、「表出段階」、「伝達段階」の4つの段階を提示しており、ほぼこれと対応するものとして、南（1964）も、A、B、C、Dの4つの段階を仮定している。

参考文献

1. 石神 照雄（1987）「陳述副詞の修飾」『ケーススタディ日本文法』寺村秀夫他編 桜楓社
2. 工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能 ―その記述方法をもとめて―」『国立国語研究所報告 71 研究報告集 3』 国立国語研究所
3. 小林 幸江（1980）「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7 東京外国語大学附属日本語学校
4. 小林 典子（1988）「外国人日本語学習者による副用語の誤用 ―誤用例の分類の試み」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』3

5. 小矢野哲夫 (1983) 「副詞の呼応 — 誘導副詞と誘導形の一例 —」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院
6. 国立国語研究所編 (1983) 『談話の研究と教育Ⅰ、Ⅱ』
7. 佐治 圭三 (1986) 「「必ず」の共起の条件—「きっと」「絶対に」「どうしても」との対比において—」『同志社女子大学学術研究年報』第37巻Ⅳ
8. 寺村 秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能 —アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ」岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本語』くろしお出版
9. 林 四郎 (1960) 『基本文型の研究』明治図書
10. 南 不二男 (1964) 「述語文の構造」國學院大学『国語研究』18
11. 宮島 達夫 (1983) 「情態副詞と陳述」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院
12. 森田 良行 (1977) 『基礎日本語1』角川書店
13. ——— (1985) 『誤用文の分析と研究』明治書院
14. 森本 順子 (1990) 「副詞‘ぜひ’について」『日本語学』第9巻第1号 明治書院